

全体討論

パネラー：山本 孝文
宋 義政
中野 高行
亀田 修一
司 会：土生田純之

土生田：それでは、始めようと思います。今日議論しなければならない問題は多岐にわたっております。中野先生にはたいへん失礼な言い方かもしれませんが、本シンポジウムの事務局では考古学を中心にやってくれ、ということでした。ただ、考古学だけではどうしても限界がございます。例えば、考古学はモノの学問でございますから、人が頭の中で考えたことが、その人がつくったり使ったりしたモノ資料にも間接的には反映されますが、直接的にはわからないことが多いのです。そこで文献の方にも来ていただいて、ご指摘いただいたり、お叱りいただいたり、逆に考古学の立場からもそのご指摘に対して反論できれば、と思っております。しかし本日のテーマからはどうしても考古を中心とせざるをえないということをあらかじめご了承ください。

それから、ご質問を非常に多くいただきました。大変恐縮ですが、全てに逐一お答えしますと、時間がありませんので、時間的に許される範囲の中でお答えしたいと思います。

ただし、私が簡単に答えられるものについて、3つ、お答えしたいと思います。

まず亀田先生へのご質問です。持統天皇の火葬に関して、天皇の火葬は別なのか、ということです。というのは、仏教では火葬は12世紀頃に広まったのではないかと、というご指摘ですが、これは、その前に道昭という僧侶も火葬されておりますし、それを火葬とって良いのであれば、6世紀から火葬塚、カマド塚というのが古墳の中であって火葬が行われており、火葬というのは決して12世紀になって始まったものではありません。ただ、仏教的な火葬が世に広まっていくのは12世紀、むしろもっと後だろうと思います。それも一向宗・浄土宗から始まっております。ただし僧侶などの中には既に700年頃から火葬を用いる風習が始まっているということです。また一度上層階級で火葬が広まるのですが、少し波ができて、8世紀後半くらいまでには土葬に戻っていくようです。

次に仏教の伝播において、仏教の公伝以前に渡来人による私伝があったのではないかと、というご質問ですが、それはその通りだと思います。ただ、どう証明するか、という問題は出てくると思います。

それに関して、古墳から四仏四獣鏡が出土しているが、それについてどうか、というご質問ですが、おそらく仏教は理解していないと思います。例えば、3世紀頃の鏡の銘文の中に、「この

鏡を持っていると子孫までお金持ちになれますよ」あるいは「この鏡を持っていると大臣になれますよ」などの意味のものが多くある。しかし、3世紀にはお金もありませんし、大臣もいません。つまり、これは字を読めるから大事にしているのではなく、何だか良く分からないけれども、良いことが書いてあるらしい、と思っていたに過ぎません。同じように、四神鏡——東は青竜、西は白虎、北は玄武、南は朱雀——というものがありますが、これも意味を知っていたわけではありませんし、あるいは、伯牙弹琴鏡には中国の思想がたくさん入っていますが、それらの意味を理解していない証拠に、四神鏡の場合、日本で真似て作ったものは虎が芋虫みたいに变化してしまいます。従って、これは新しい意匠として取り入れたものであるといえます。これは現在でも認められることで、英語のロゴがプリントされたTシャツを着ている人がいますが、それを日本語に訳すと、とんでもない意味で、とても恥ずかしくて外を歩けない。それはデザインとして取り入れているだけということです。あまり評価しすぎてもいけないということでございます。いくつか私の答えられることをお答えしました。

ここから本題に入っていきたいと思います。まずは亀田先生にご質問です。渡来系文物ということでたくさん挙げられました。例えば、(レジュメの図) 35番の「3、4世紀の倭系遺構・遺物」という洪漣植さんの図が載せられていますが、その中に巴形銅器が入っております。また、同じような例として、ここでは詳しく申し上げませんが、筒形銅器というのもございまして、これらは倭系であるといわれておりました。しかし現在では朝鮮半島系であるといわれます。これは一つの遺跡からたくさん出てきたわけですね。従って巴形銅器は倭系ではなくて朝鮮半島製ではないかともいわれております。それが正しいかどうかはまだわかりません。私は倭系である可能性はまだ高いと思っておりますが、このようにしてここに挙げられたものが未来永劫「朝鮮半島製」「倭系」といえますか、ということからまずお伺いしたいと思います。

亀田: 35番の私あげた資料もそうですが、これらに関してはどんどん研究が進んでいます。特にわかりやすいのでいいますと、例えば須恵器のお話をいたしました。日本でいちばん古いのは、一般的には陶邑という大阪の資料なのですが、今日あげました大庭寺の資料が出てくるまでは、大庭寺と類似するものは皆、朝鮮半島からの持ち込み品だといわれておりました。それが、大庭寺が見つかったので、これは日本で作っていたものだとわかりました。そういった例がたくさん出てきました。例えば(レジュメの図) 24番の資料ですが、これは田んぼの下から出てきました。須恵器の窯は普通、山の斜面にあるので、これが出たとき全然わからなくて、近くに平安時代の窯があるので、平安ではないかといわれていて、私もそう思っていたのですが、その後、いろいろ検討した結果、朝鮮半島の全羅道地域、いわゆる陶邑とは別のグループの古手の窯だということがわかりました。これが出てきたことによって、この辺から出てきた陶邑に属さないものも、もしかしたらこれも日本産かもしれないということがいえます。ということは、土生田先生からの最初のご質問に戻ると、こういう資料は、どんどん資料が出てくる中で、動きます。ですから昨日の山本(孝文)さんのお話の中にあつた、中国で新しいものが見つかって、百濟(製)だといわれていたものが中国(製)ではないか、といわれているのとまさに同じ状況です。従って、これに関しては「ひとまず」「現時点」としておきたいと思います。

土生田：今お聞きいただいたように、考古学は発掘で新しい資料が出てまいりますので、これまで日本では出ないと思われていたものが出てくることで一夜にして変わることがあります。ただ、例えば（レジュメの図）44番の野中古墳の陶質土器の話が出てきましたが、将来日本産ということになるかもしれません。ただしこれは主体部の中に把手が取れたものまで大事に入れられていたというお話がありました。一方で明らかに日本産の須恵器が墳丘上から出ております。主体部にあったものももし日本産であっても墳丘上から出土したぞんざいに扱われている日本産の須恵器とは明らかに扱いが違うわけですから、そういう違いに基づいて各々の出自を考えていくということでもあります。従って、将来的に評価が変わったとしても、当時の人の価値観という点では追究できると思います。わざわざこういうことを申し上げたのは、考古学の研究者は意外とそういうことを書かないので、どこから出てきたどこ製のものである、ということばかり書きますけれども、本来はそういったものをどのように扱っていくか、どのように評価するかというところを考えていく必要があるのではないかと思います。

今度は山本先生に伺いますが、先ほど亀田先生のお話の中で、塗りこめ柱、柱をたくさん立てて壁の中に塗り込めてしまう大壁住居のお話が出ました。オンドルやカマドつき住居が朝鮮半島の人たちの住居であるという中で、大壁住居も出てきました。そこで大壁住居について伺いますが、これは確かに朝鮮半島の百済でも出ていますし、有名な艇止山遺跡でも出ていますが、これは普通の家ですか？

山本：百済の住居址、集落に関しては最近大規模なものが発掘されていますが、一言でいいますと、大壁住居を含む集落はほとんどありません。従って日本ではこういった大壁住居が出ると百済系といわれまして、それは間違いではないのですが、日本では一般の住居として使われていたとしても、百済において大壁住居がどういう位置づけであるかという、これは特殊であるとかいえません。これは百済のいちばん最後の時期の泗泚時代の大規模な集落を見ても、大壁を含んだ大集落は今のところありません。例えば最後の都であった、現在の扶余ですが、泗泚都城の中からいくつか見つかったり、先ほど土生田先生からお話がありましたように、武寧王の殯であるという説もある艇止山遺跡という特別な、確実に一般の住居ではないところで見つかっております。比率としては一般の住居址は、やはり竪穴式住居であって、オンドルを持つ、こういうものが多いのですが、そこに大壁住居が含まれるかという、必ずしも含まれない。したがって、百済の中においてもこれは一般的では全くない、ということです。ちなみに韓国の方では今、大壁というのは名称として形を想起しにくいというので、壁中住居という言葉が使われています。

土生田：大壁住居は例えば鳥取県の倉吉市でも確認されていますが、逆に本来の出自の大元である百済でも特殊なものであることから、日本で出てくるということは、ここからが重要なのですが、百済で普通の住居でオンドルやカマドつきは多いと思いますが、こういう特殊なものが出てくるということにはいったいどういう意味があるのか、亀田先生と山本先生にそれぞれご見解を伺いたいと思います。

亀田：大壁住居に関しては韓国では一般の人々の住居ではないものの、ただ日本の中では山本先生がおっしゃったように、百済で出ているよりは逆に多い、ただこれはいずれ韓国ももっと増えてくると思いますが、最初に大壁じゃないか、といわれていたのは公州の王宮跡という所で、残り悪かったですけれども、その可能性がある。まさに王宮で見つかっている。そういう特殊なものと考えれば、日本に入ってくる時も、これが当たっているかどうかはわかりませんが、そういう中で選択的に取り入れた、ということもあるかもしれません。

山本：他のものでもそうですが、他の地域で特殊だったものがべつの地域に行った時に特殊でなくなったりとか、あるいは他の地域で普遍的だったものが他の地域に渡ったときに特殊なものとなるという例はいくらでもありますので、百済では特殊であったものが、日本で受け入れられた時に、これが良いから、ということで一般の人に受け入れられた結果多くなったということは十分考えられると思います。

土生田：残念ながら日本の住居に大壁住居はそんなに多くないと思います。暮らしてみたら暑くてたまらないと思います。蔵のような構造ですので。亀田先生に伺いますが、むしろこういう特殊なものがあるというのは、文献史学との関係でいいますと、我々考古学は文献史料で出てこないような一般庶民の交流もわかるのですが、逆に文献で出てくる上位階層の人たちとの関係で、大壁住居というのは評価できるのか否かということを伺います。

亀田：どういうことでしょうか。

土生田：今ちょっとお話にもありました艇止山というのは公州ですが、判明している王陵における殯の場と墓の位置が、艇止山の位置と宋山里という公州の百済王陵の位置とほぼ合致することから、(艇止山が) 殯の場所ではないかともいわれているわけです。このように考えると、大壁住居というのは、先ほど山本先生のお話にもありましたように、一般の集落でそれほど基本的なものではないということになると、むしろ何か特殊な、ステータスのある要素で捉えられる可能性はないであろうか。葛城のところで出てくるとすれば、相当ステータスが高いということになりますし、そういった上位階層との関係を考える余地があるか否かということです。

亀田：否定的で申し訳ないのですが、私は福岡の豊前の出身ですが、ご存じの方もいらっしゃるかと思いますけれども、正倉院の大宝2年の戸籍があるところです。この豊前市で掘ったところで、大壁住居が出ていて、それはごく普通の村です。それから先ほど出た鳥取の例も、そんなに特別な村であるとは考えにくいので、それを特別なものとして理解できるかどうかわかりません。

土生田：回りくどくお話ししましたが、じつは古墳から出てくる威信財、最高級の威信財というのがあって、例えば新羅でしたら、王冠が金製・銀製・金銅製、素材によって意味が違うといわれているのですが、日本の古墳は、大変質の高いモノがわりと小さな古墳から出てくるのがご

ざいます。私は考古学をやっておりますが、溺愛するのは大嫌いでして、考古学の限界を最初に申し上げておかなければいけません。ですから、威信財もそうですけれども、これは上位階層の人が使用する遺物だから、上位階層の墓である、これは上位階層のものだから上位階層の邸宅である、という議論が現在多すぎると私は感じている、ということをお申し上げておきたかったわけです。ぜひ騙されないでいただきたい。現在そういう議論が横行していると私は思いますが、それぞれお二人の感想を、言いにくいことを承知で伺います。では、山本先生からお願いします。

山本：もちろんその通りだと思います。威信財といわれているものが本当に首長級のものだったという例もありますが、昨日ご紹介しました、中国のおそらく南朝からもらった官印、印章のようなものが、どこにでもあるような中小の古墳から出ている。そういったことからわかるように、その人の持っている社会的あるいは文化的ステータスと墓制をイコールとして考えることは問題があると思います。ある程度の線引きはできるかと思いますが、お墓には政治的なものが含まれていることももちろんあるけれども、その前にお墓である、という機能をまず重視しなければならないのであって、必ずしもそこに社会的・政治的なもののすべてが反映されているということではできないと思います。

亀田：考古学の限界の話はいつも考えています。といたしますのは、渡来人のことをやっているのですが、この時にも考古学の限界を意識しています。まず考古学的にどこまでいえるのであろうか、ということをやります。その、何を選ぶかという時に、例えばカマドを扱う場合に、5世紀くらいからカマドは出てきます。そうすると4世紀にカマドが出てくると、もし日本人が使ったとしたら極めて特異な例ですね。もし日本人が使ったのであれば、例えば朝鮮半島に行って、良かったので日本に戻ってきて使った、ということもあるかもしれません。でも大多数の場合は、朝鮮半島の人に来ていてと考えます。もし5世紀の古い段階だったら同じように考えるんですけど、その中でもどう考えても日本的なモノがたくさんあったら、その中で朝鮮半島から帰ってきた人がムラの中に住んでいて、すごく舶来好きといいますか、朝鮮半島のモノをどんどん受け入れて、という人も当然いたと思います。ですから、入ってきたモノ・時間、いろいろなことを考えながらチェックしていきます。オンドル住居の場合は、日本人は受け入れなかったと考えると、大多数は渡来人ではないか、と考えるわけです。そのようないろいろなチェックを行って考えます。ですから考古学でどこまで話ができるか、ということは常に考えておまして、先ほど土生田先生がおっしゃったお墓の中の話もそうです。特にお墓に関しますと、例えば新沢千塚というのがありまして、前方後円墳ではないのに、非常に良いモノを持っている、それをどう考えるかという、政治的な力だけではなくて、経済や交易に関わったのではないか、朝鮮半島から来たのではないか、など政治とは別世界のモノの移動ということも当たり前ですがあり得るので、単純に考えてはいけないと思います。ある程度は単純に考えて成立する場合もありますし、一方ではどう考えても説明できないものもどこにでもありますので、繰り返しになりますが、考古学ではどこまでいえるのかということに気をしています。

土生田：遠まわしにおっしゃいましたけれども、その学問の限界性を常に意識しなければ、これは空想になり、妄想になり、ということになってきます。常に限界を考えながら、それでも限界に挑むというのが重要ではないかと思います。とくに近年はわかりやすくということを求めるあまり、問題を整理しすぎている、単純化しすぎるといった感想をもっていたので、まず最初にそこを申し上げました。

それから、ご質問の中でもう一つ私が答えた方がいいと思うものがあります。宋先生の講演で、新羅の古墳からペルシャ系のガラス製品が出ているが、日本ではどうかというご質問です。これは有名な安閑陵といわれている古墳、6世紀前半だと思いますが、ここから同じようなモノが出ていますし、ガラス容器でいえばやはり新沢千塚からも出ております。そういったものが出ておりますが、それが即、新羅から来たのかということは議論の余地があると思います。

そこで、新羅のことについて宋先生に伺いますが、昨日と今日聞いてもらったらわかるのですが、東アジアというのは、根本的には中国が大前提にあって、その影響の中で独自性を発揮するということが普通です。百済・高句麗などは頻繁に使を出しているわけですが、新羅は6世紀中葉以後は非常に深く中国との関係を持つわけです。それに反して4世紀・5世紀・6世紀初頭くらいですね、昨日お話にあった積石木槨墓などもそうだと思いますが、中国的なものは間接的にはわずかに認められますが、基本的には高句麗系、北方系、西域系、そしてやや南方系、これは倭国・伽耶の一部といったものが目立ちます。中でも非常に西の方が目立ちます。剣などですね。これはペルシャに起源を持つ、ペルシャのものかどうかはわかりませんが、もっと東の中央アジアの可能性も高いですが、この新羅の文化の特性というのを宋先生はどのように考えておられるか、あるいは中国との関係についてはどのようにお考えかということ伺いたしたいと思います。

宋：昨日発表した内容についてのご質問だと思います。昨日お話ししたように、6世紀中葉以前は、高句麗や西域との関係がわりとたくさん見られるわけですが、中国との関係を考える場合に第一次的には百済と中国、つまり西海岸を通じて中国の文化が入ってくるということが当時の特徴として挙げられるわけですね。つまり4世紀中葉から5世紀中葉にかけては、百済の勢力が非常に強かった時代です。313年（高句麗による西晋の楽浪郡占領）以前にも北の鮮卑族との関係もありましたが、この313年は4世紀初頭ですけれど、この時期は高句麗が北の地域では強大な力を持っていたわけです。したがって昨日の山本先生の発表にもありましたように、百済と中国との関係、とくに百済と南朝の関係ですね、百済で出土した陶磁器を見ましても、そのほとんどが南朝の陶磁器でした。ですから、西海岸以外を通じての交流は難しかったのではないかと、ということですね。したがって、百済が強大だったために中国との交流が非常に難しい状態だったわけですね。5世紀の前半くらいまで、新羅の西側にある伽耶地域も政治的・経済的な状況で、例えば倭など色々な交流が頻繁に行われていました。そういう状況を見ると、新羅が西側との交流を行うのが非常に難しい時期だったといえます。したがって新羅の立場としては、高句麗など北方に目を向けて、とくに昨日お話しした馬具については北方系のモンゴルの馬具が入ってきていますが、新羅成立以前の辰韓時代からあった北方ルートを通じた新羅になっても維持しつつ、そういうものを通じて北から主に外来的遺物が入ってきたのではないかと、考えています。

もう一つお話ししたいのは、5世紀後半から6世紀初頭くらいは、新羅と百済が高句麗に対抗するという状況があったわけですが、それ以降の状況は非常に複雑になって、新羅はそのうち漢江流域、ちょうど高句麗と百済がひしめき合う所ですが、この漢江流域を新羅が抑えこむわけです。この漢江流域というのは対外交流に非常に重要な地域であって、これが西海岸の交易ルートを確認する入口になります。そのように考えますと、6世紀中葉以降の外来系文物、中国との関係というものを理解できるのではないのでしょうか。

土生田：それはおおむね理解できるのですが、5世紀代は基本的には高句麗は南下政策をやって、新羅は属国扱いを受けるわけです。その高句麗自体は北朝が中心だと思いますが、中国と深い関係があって、中国系の文物がたくさん入っています。そうすると、高句麗を介した中国系文物はなぜ新羅には入らないのか、ということをお聞きしたいのです。

宋：高句麗については、とくに4世紀代に仏教を取り入れて中国との関係は非常に深いんですが、広開土王の時代になりますと高句麗の勢力が非常に強くなり、中国の東北部にまで勢力を拡大するという時期になると、中国との緊張関係が起きる。そういうときにはなかなか中国系の文化は入ってこなかったのではないかと。緊張関係があるわけですから。初期の段階では中国の文化を取り入れたけれども、領土が拡張される高句麗が非常に強大な時期には、中国との緊張関係があったために文物が入ってこなかったのではないかと。したがって、高句麗に入ってこなかったのも、新羅にも入ってこなかったのではないかと考えます。

土生田：そういう時代の推移は文献からもうかがえるところですが、そこで山本先生と亀田先生にうかがいます。新羅に限ったことではありませんが、国というものが現在の形態とは違うとしても、緊張関係にあったときには、文化は入らないものなのでしょうか。

山本：そんなことはないと思います。実際に日本でも、あまり新羅と仲良くなかったというわりには、新羅のものの方が百済よりも入っていますし、むしろ仲が良かったといわれる百済からのほうが、確実なものは入ってこないということがあります。昨日の宋先生のお話にもありましたように、政治と経済は切り離して考える必要がある。文化もそうですし、仲が悪くなっても、百済の場合ですと中国の文物を比較的一生懸命に取り入れられたりもしています。百済と高句麗も伝統的に非常に仲が悪かったといわれ、文献の上でもそういわれておりますが、やはりそういう時期に高句麗系のものが百済に入ってきていますので、経済的なものなのか、あるいは文化的なものなのかはべつにしても、文献にみられる仲の良くない関係とモノの流れとは、その性格にもよりますが、一線画して考える必要があると思います。

亀田：具体的にもうひとつイメージがしづらい。実際に、高句麗がよくわからないのです。考古資料が増えてきたらもっといろいろわかると思いますが、実際、高句麗関係はあれだけのものを掘っていて、先ほどから百済で出ているような陶磁器類のようなもの、中国から多少は入ってい

るのかもしれませんが、そんなに文物は出てきませんよね。そういうものはどうなのか。それと、レベルの話、まさにそうなんです、百済と日本の関係話を話すときに、4世紀代に日本と百済とでいろいろやっているというけれども、現実には、百済系遺物は、上の方は出るんだけど、そんなに出てこない。その点は、もう少し具体的にやっていくとどうなのか。ただ、現実的に新羅において中国系のもはみつかっていない。宋さんの説明は、それはそれであたっているのかなと思います。

土生田：宋先生に、いまの二人の話をふまえてうかがいたい。政治的な緊張関係だけで文化の流入があったとかなかったとかいうのは、そうではない場合がある。ただし、あまり入っていないとなると、本来、新羅の民衆の生活、新羅の基層文化は、百済とはまったく違ったものなのか否か。

宋：文化の波及と政治的な関係についてご意見をいただいたわけですが、全体的にいいますと、百済は、昨日の山本さんの発表にあったように、受け入れ方は直接的方式ですね。高句麗の場合は、中国の陶磁器を模倣して、高句麗化したものが作られていくわけです。そういう状況の違いがあるわけです。ですから、こうした高句麗と関係のある新羅には、当然、高句麗ですでに中国ふうのものが高句麗化してしまうわけですから、中国のそのものが一次的に伝播してくるというのは難しいだろうと思います。そういう意味で来ないといっているわけで、けっして関係がないわけではなく、直接的には来ないということをお話しているわけです。土生田先生の質問ですが、新羅の基層文化についてですが、昨日、辰韓時代の騎馬文化が北方ルートで入ってくるということをお話しましたが、けっして騎馬文化を持った人たちが辰韓で勢力を持って新羅の王になったというわけではない。そういう北からの人々と在地の人々が融合して基層文化を形成し、それを基本にして百済とは異なる独特の新羅文化を形成したのではないかと考えています。

土生田：文化の入り方というのは、モノそのものが入る場合と、変容しながら入ってくる場合とがある。これは亀田先生の論考に詳しく書いてあります。それから、モノそのものが入るにしても、仲介がある場合と、直接入る場合がある。それを考古学的にどう見極めていくかというのは、なかなか難しいところがあります。繰り返し聞いたのは、新羅が世界のなかで、東アジアのなかで孤立した存在ではないということをおまづ知っていただかなくてはいけない、ただし、そのなかで非常に特殊な地位を占めていたということも確かだろうと思うからです。聞きたいことはたくさんありますが、時間の関係がありますので、次の大事な課題に移っていきたいと思います。

これはまず亀田先生から口火を切ってもらって、ここでいよいよ中野先生に登場してもらわなければなりません。これは文献との絡みも出てくるかと思いますが、私ども考古学の立場からしますと、3～4世紀は置いておきますと、朝鮮半島との絡みで渡来人がたくさんやってきたという点で、わかりやすいのは5世紀後半です。6世紀終わりから7世紀という中野先生が総括されているところを否定するつもりはありませんが、亀田先生の話にもあまりなかったように思います。具体的なことをかいつまんでお話してください。

亀田：データがまさに示していますが、5世紀の話は朝鮮系の資料に関してはたくさんあげることができます。吉備、大和、河内をあげましたけれども、北部九州、瀬戸内海沿岸地域もそうですし、まさにたくさん出てきます。ただ、これが6世紀になるとかなり減ってくるのは明らかです。それに関しましては、先ほども申し上げましたが、日本人も、イロリの、炉の生活だったものがカマドの生活に変わるわけです。それから、甗、蒸し器を使っていなかったのが本格的に使うようになるとか、そういう生活の変化、技術の変化が日本のなかに定着してきて、朝鮮半島からやってきた人たちが日本に来て、少し形やモノは違うけれども、そのまま使えば使えるというような生活が6世紀の日本には出てきた。そういう意味でいうと、朝鮮系の資料、つまり、一世は少しは持ってきたかもしれませんが、渡ってきてから、壊れたらまた同じようにつくらなければならないという話にはならなかったようです。ただ、そのなかで先ほどの交流ルートの話をしましたけれども、それ以外にじつは、さきほどの甗とか蒸し器に取っ手がついている。取っ手のなかに、じつは溝を入れるというのがあります。これは面白いんですけど、朝鮮半島にはたくさん見つかって、日本では基本的には出ません。なぜ出ないのかはわかりませんが、取っ手が出てきていて、作り方はみんな日本のものなただけけれども、取っ手の部分だけに少し傷が入ったものだけは、朝鮮系の人がかんだ可能性はあると私は思っています。そういうような特徴的なものを探すと、まったくないわけではない。もう一つは、韓国に行かれた方はよくご存じだと思いますが、クッパやカルピタンを食べるときには、基本的には平底の鉢ですよ。一人前ずつ出てきますね。じつは、日本にこの時期、古墳時代にそういうものはないんですが、朝鮮系のもは基本的に平底なんです。弥生時代、縄文時代は平底はあるんですが、古墳時代に関しては、基本的に平底は出てきません。そういう、平底、取っ手の傷とか、そういう特徴的なところで探してみると、数は減りますが、大阪なり福岡なり岡山でもあります。そういうものを追いかけて探していくと、じつは、中野先生がおっしゃった推古朝ですが、推古朝の変革というものを考古でやっている方々がいまして、焼き物の窯、鉄器生産なども6世紀末、7世紀初をみますと地方でたくさん出てきます。その一つの例が、石川県小松市額見町遺跡です。ここは山がありまして、少し平地に降りてきたところで独立丘陵みたいなところに出てくるんですが、突然7世紀の初頭ぐらいにたくさんオンドル住居が出てきます。それはどうも鍛冶関係、鉄器の製作等がされていたようで、担当された方は、最初はなんでこんなものが出るのかなと思ったらしいんですが、いろいろ話をしていると、移住してきてそういう生産を始めた。じつは、この額見町遺跡の奥の方で、製鉄もやっていたと。それから、土器作りもあります。ですから、かなりまとまって人が移住してきている可能性があります。そのようなことを地方でやっているのではないかという研究があるわけです。どこでもというわけではありませんが、多少そういうものがありますので、考古学的には捉えにくいんですけども、そういったものはあろうかと思えます。

土生田：山本先生、いかがですか。百済系は、飛鳥の古墳なども陵山里、あるいは陵山里東古墳群に似ていますが、一般的なところであるでしょうか。

山本：日本のなかでというお話ですと、終末期古墳の石郭は大きさの面でいうとそうですし、構

造は似ているなど思うものはあるんですが、それがほんとうに百済につながるのか、模倣しているかという点に関してはわかりませんが、ある程度の影響、思想としての影響はあると思います。それが技術として日本に入ってきて、日本式に作られたとなると、判断しにくい部分もある。流れとしては、百済でもそうですし、日本でも、古墳だったら、大きめのものから一人ぐらいの、百済でもやはり先ほど亀田先生がお話しされたように、二人を並列する並列墓、合葬のものから、泗泚期の600年を前後してだんだん単葬に移り変わっていくという傾向はみられると思います。それと日本のそういう変化は連動していると考えてもいいでしょう。ほかの資料でいいますと、土器の変化、須恵器などでも日本でも一大変化が起きます。ああいう様式上の変化、百済、新羅も含めて土器の様式上の変化が起きますが、それが連動しているというふうにみてもいいとは思いますが。それが単純に百済からの影響、あるいは新羅からの影響で日本でもそうなったというよりは、もう少し視野を広げて中国も含めて、とくに中国の影響ですね、そういうモノの流れとして百済でも日本でもそういう変化があったとみたほうがいいのではないかと思います。

土生田：その場合、5世紀後半の墓制ではなくて住居でも、先ほど、亀田先生のところで菅生遺跡や高塚遺跡、住居だけではないですが、東でも、群馬県の西毛では渡来人の集落らしきものはたくさん出ていますが、おおむね伽耶系だと思います。百済との関係は政治的には強く描かれています、はたして民衆レベルではどの程度の人が渡来して来たのかという点については、山本先生、考古資料からみてどのようにいえますか。

山本：6世紀以降の考古資料からみて、民衆レベルで百済からの影響というのは、ほとんどわかりません。難波の宮では土器は出ていますが、これは民衆レベルとはなかなかいいがたいです、百済の支配者階層ではない一般構成員の人々と、日本の人々が使っていた文化的な側面での比較はほとんど難しいです。

土生田：そこで中野先生にうかがいたいのですが、6世紀の中葉から後半にかけては、欽明と聖明王との関係等、かなり綿密な連絡があったのかもしれませんが、考古資料からみますと、あまりそのようなことは窺えない。そのへんの評価は、文献の方からはどのようにおとりになりますか。

中野：おっしゃるとおりです。考古に関してはまったくの素人ですので、亀田先生はじめ、先生方に教わりたいと思います。5世紀の前半に吉備に製塩・製鉄の遺跡がかなり顕著にみられるけれども、5世紀後半にそれがいったん衰えて、6世紀の前半以降にこの二つの関係の遺跡がまた増えてくる。この特徴を亀田先生がずいぶん前に指摘されていたのを私も存じ上げていたんですが、表1【表1】伽耶諸国の滅亡と編戸・屯倉と「任那の調」をもう一度みていただきたい。555年、欽明16年のところですが、『日本書紀』をみますと、蘇我稲目ともう一人が派遣されてこの白猪屯倉を設置します。ですから、簡略して「稲目等」が派遣されてこの屯倉をつくったと。翌556年の児島屯倉に関しましては稲目一人の名前しか出ておりませんので、稲目が派遣されて

設置したと。そうしますと、この二つは蘇我稲目が関与していたことは明らかです。しばらくして、敏達3年(574年)には、蘇我馬子がと書いてありますので、同じ蘇我氏が白猪屯倉に関わっています。じつはそこに白猪史膽津という人が出てくるんですが、膽津が(欽明30年=569年に)派遣されて丁籍を作成している。ということであれば、明文化されてはいませんが、この白猪屯倉に関しては、蘇我氏が関わっていたということはまったく問題はないでしょう。さらに遡って欽明元年(540年)の——こちらは明記されていませんが、蘇我氏のことは一言も触れていないんですが——秦人、漢人の戸籍の編貫の記事があります。これがどこについていっているのかわかりません。おおざっぱな記事ですが、安閑元年(532年)の金官国の滅亡のあとにこの人たちが関わって白猪屯倉・児島屯倉設置という流れで考えてよければ、575年に蘇我馬子が京師に帰って屯倉のことを復命する。このあたりに錯簡があるんですが、その翌月ではないかといわれているところに、天皇は新羅が任那を復興しないことを非難して彦人大兄かといわれている皇子と馬子に任那復興を命じます。この流れのなかで「任那の調」が出てくる。ですから、蘇我氏の人たちをキーパーソンにしてみると、じつは、朝鮮半島から来た人たちの、いわゆる律令的戸籍ではないにしても、なんらかの名簿に登載したという作業と屯倉の設置、「任那の調」、新羅にたいして金官国にたいしての名目だけの宗主権といいますか、支配権を争う形で新羅に強要する。新羅はこれに応じるわけですから、名目的にそれに応じたという反応は出てきておりますので、外交と国内の支配体制、それから編戸のような、いろいろな意見がありますので明言はしませんが、なんらかの形で個人身支配に関わるような、いろいろなものが、もしかしたら一つのパッケージの話としてなっていたものが、編年体にするときにばらけてしまったと解釈できるのではないかと。そう考えると、話は戻りますが、亀田先生がおっしゃった吉備の一連の製塩・製鉄の遺跡の評価にたいして、白猪・児島の屯倉が吉備にあるのは偶然ではないのではないかと考えました。そこにたいして単純に技術者を配置したというのではなく、支配権についての認識が出てきたので、「任那の調」ということになると、こんどはヤマト的というか日本的というか、中華ではないと私は思うんですが、貢納奉仕関係、要するに上下の関係、日本的な上下の関係が、こういう流れのなかで大量の伽耶系の人たちが吉備に来るなかで醸造されたというシェーマを建てられないか。土生田先生から考古的なものとの関連ということだったので、あくまで文献で想像するに6世紀の後半にはこういう動きがあったことが可能性として指摘できるのではないかと考えました。

土生田：5世紀後半のことですが、亀田先生も一部お話しになりましたけれども、東日本では西毛、北信・南信、甲斐、遠江西部、そして東三河——同時期に、それまでの伝統にない、たぶん朝鮮半島の伽耶系の遺物・遺構等がセットとして出てくるわけですね。このような300キロに及ぶ遠隔地間に偶然に同時に渡来人が来るというのはなかなか考えにくいところです。東日本は馬匹生産、西日本は鉄器生産が多いと思います。さきほどの大阪府大県遺跡などもこの時期に起きた変化だと思いますが、そういった多数の離れた地域に個々ばらばらに、たまたま偶然に来たというのは非常に難しいところがあるわけです。5世紀後半にヤマト「中央」の意向が働いていたと私は考えざるを得ない。ただし、地方にもそれなりの主体性が当然ある。これは、ここで詳し

く言うと時間がかかりますが、東日本でも西日本でも、ヤマトに強制的に渡来人を受け入れさせられたのであればどの地域でも渡来人は同じ扱いになるんですが、それぞれの地方の状況によって違うんです。先ほど、亀田先生が示された古墳から窺える階層構造、あれは群馬県でもまったく同じことがいえます。そういうことからすると、「中央」と地方の関係は、6世紀後半と5世紀後半と、どのように考えられるか、ちょっとお伺いします。

中野：伽耶の滅亡——これは滅亡ですから悪いこととして私も考えてきたんですが、今回、『日本歴史』に論文を書いたなかで、百済が滅亡したときに、かなり大量の貴族や技術者、あるいは知識をもった文化人たちが来ただろうと。それで私は、大宝律令以降の先進文物のみならず、政治的なシステムも導入したのではないかと。そう考えると、日本の古代国家をつくるのに非常に役立ったと考えると、逆に、伽耶の方たちには申し訳ないですけど、非常に日本の国家形成にとってはプラスだった——そういうコンテキストでご理解ください。誤解のないように。そうしますと、伽耶から来た人たちが、私は吉備に行っただろうと。簡単にいうと、それだけです。亀田先生がおっしゃったのは、ヤマトから吉備に行っただろうと。それで昨日あたりからずっとお話しさせていただいたのですが、亀田先生の頭のなかにあるのが、葛城との関係です。さきほどスライドのなかに出てきましたが、葛城との関係があります。そこに入ってきた人たちが吉備に行ったというコンテキストでお考えになっていた。私は、伽耶から直に行ったというので、違う意見だということなんですが、じつは、この葛城氏のなかから蘇我氏が出てきているという、一つワンクッションを入れますと、こちら（ヤマト）から回って吉備に行ったという考えももちろんありますし、伽耶から直接吉備に行ったという考えもある。ただ、これは考古学的にも文献でも、どちらというのは証明できないでしょうし、たぶん、これはいろいろなパターンがあったでしょう。なにも私と亀田先生の考えを折衷したわけではなくて、いろいろな形でやはりここに蘇我氏がいて、来た人たちを吉備に再配置したという可能性と、ニーズが多ければ直接、伽耶からここにという話があったのではないかと。なにが言いたいかという、そのときにヤマトから行った人たちが全員これを支配したのかとなると、屯倉の構造なんです、いままでは、吉備臣——吉備を支配していた大首長だと考えてください——たちが5世紀に支配をしていて、たぶん中間層の中小首長を通して伽耶から来た人たちを支配する構造になっていたのではないかと。もちろん、伽耶から来たリーダーのような人たちはここに入るという複雑な構造があると思いますが、単純化するとこうなる。しかし5世紀の後半に雄略天皇の関係で吉備の反乱伝承がありますので、そのあたりで亀田先生ご指摘のように、一回吉備の生産能力が落ちるんですね。そうすると、吉備の旧支配層のかわりにヤマトの大王・王が吉備に来て、そのときに蘇我氏が活動したのではないかと。土生田先生がおっしゃったことに少し迂回しながら説明しましたが、現地ではこういうふうな構造になったということを前提に、伽耶から直なのか、葛城経由なのかはわからない。たぶんルートとしては両方あったと想定できる。問題なのはむしろ、いままで吉備の大首長のもとで伽耶から来た人たちを支配していた人たちが、こんどは違う形になったのが6世紀です。そのときに注目されるのが、最近多くの若手の研究者がいつているように、筑紫君磐井の反乱以降、屯倉制、国造制がかなり整備されていったのではないかと。これが6世紀前半にもしそうであるとす

れば、6世紀後半というのは確実に、朝鮮から来た人たちも、筑紫君磐井の反乱以降の継体・安閑・宣化・欽明という流れのなかで、新たな支配体制に再編成されていったと解釈できるのではないかと考えています。

土生田：ありがとうございます。亀田先生は当然何かこれにお話があるのではないのでしょうか。

亀田：今日の発表について、中野さんとは、べつに際立った違いだとは思っていません。中野さんのレジュメに亀田（【亀田修一説】）というところで、「彼らはヤマト王権から派遣された」とあり、実際にそう思っています。それは先ほども言いましたように、葛城関係だと思っています。ただし、その葛城は蘇我が抑えている。その後に入ってから葛城であると思っていますけれども、実際、お話ありましたが、文献の中ではじつは屯倉の設置のところに葛城も関わっていますよね。そういうのがありますので、そういう形の入り方はしているだろうと思っています。今回お話しませんでしたけれど、吉備のごく初期の瓦は豊浦宮に運ばれている話もあって、実際そういう所は繋がっていると思いますので、このときに渡来人がどんなふうに入ったのかという点で、私がヤマトから派遣されたといったのは何かというと、当時の吉備はもうこの時点でさっき山本さんがおっしゃったように落ち込んでいますので、直接渡来人を吉備が迎え入れるというのは無理だという意味で、ヤマト王権が関与する中で迎え入れたと。これは、交換的に一回ヤマトに行ってきたのか、それとも九州でヤマト側が管理していてそのまま呼んだのか、これもう分かりません。少なくともヤマト王権の関与のもとでというのですから、中野さんのおっしゃっていることを全然否定するつもりはないし、その通りだと思っています。ただし、これまでの研究で東漢や西文、さまざまな史も出てきます。そういうものを含めると、よくわかりやすいのが白猪氏の関係ですが、ヤマト側からいろいろな関与がなされ、渡来人が入って来てというのが、実際に6世紀後半の製鉄に関しても、伽耶の滅亡と（の関連と）というのは私は思っていますし、じつは渡来人関係の所は、吉備もやっていますけれど、ちょっと後ろにあたる豊前もやっています、豊前もじつは先ほどおっしゃっていた、磐井の反乱以降の、安閑紀に豊前の国に五つのミヤケを置くというのがあります（安閑天皇2年 [535] 5月甲寅条）。そういうのもじつは渡来系の人たちの新しい移住を考えると可能だと思っていますし、じつはその豊前の中での朝鮮系の資料の出方も、5世紀段階もそうですけれど、結構6世紀段階も出てきます。それはやっぱりそういう理解で良いのかと。特に田川という所があるのですけれども、香春岳というのがありまして、銅を出す所で、新羅の国の神様がみずからやって来たと書いてある所がある。この場合の新羅というのは、まさに、広い意味では新羅ですけれど、元々伽耶地域の人がやって来ていて、つまり、伽耶は新羅に吸収合併されますから、その人達がやって来れば、新羅からやって来たっていうのもあると思いますので、じつは伽耶と新羅の関係というのは微妙だと思います。用語の問題も含めてですが。実態として慶尚南北道くらいの人達が6世紀の段階に、532年でも562年でも構いませんが、やって来ているというのは実際にあるし、考古資料でもそれはある程度、豊前側ではいえるのかなと思っています。

土生田：私の立場としては、白熱したやりとりを期待しているのですが、お二人とも大人でいらっしゃる。それに関連して皆さんからご質問があります。九州や吉備・畿内——後の畿内ですが——そういった所にたくさんの渡来人の痕跡があるけれども、例えば日本海に直接やってきた人はいないのかどうかということです。これは私が先に答えておいた方が良いでしょうが、亀田先生は出雲でそういったものを探されて論文を書かれています。また丹波・丹後・但馬地方、いわゆる北近畿で近畿中枢や九州を介さない独自の横穴式石室が朝鮮半島から入っている例もあります。ただし、こういったものはトピック的なものであって、非常に大きな流れではないわけですね。そういったものがまず文献に残るということはほとんど期待できない。多少は福井県の敦賀がツヌガアラシト伝承ということで記事が掲載されています。あるいは、播磨などのアメノヒボコ伝承があるかもしれませんが、文献の限界はそこにあります。逆に考古の限界はこれまで申し上げた通りです。お互いが限界を知らないと、取り入れることもできないだろうと思っています。やはりお互いの限界を知った上でバトルをする必要があるだろうと思っています。

もうひとつ問題がありまして、文献に出ておるから（とって）必ずしも資料で確認できないわけですが、考古資料が出ていても、逆の場合もあるわけですね。それで、最近、6世紀の前半から中葉にかけて前方後円墳が朝鮮半島の西南部、全羅道地域から13基確認されているというのはご存知かと思います。また東南部の地域では、慶尚南道の倭系の横穴式石室というのが最近確認されています。これはひょっとしたら日本との関係があるかもしれません。これについて墓制では分かっているのですが、被葬者は果たして日本人なのかどうかということも分かりませんが、遺物の中には須恵器など、日本製のモノも入っているのは確かです。それだけでももちろんありません。現地のモノも入っているわけですね。宋先生に伺いたいのですが、果たして、倭人の痕跡があるような集落、あるいは住居等が発見されているのでしょうか。6世紀前半ですね。

宋：先ほど亀田先生が福岡県福岡市の西新町遺跡を例に挙げられましたけれども、残念ながら西新町遺跡のように、いわゆる渡来系の文物というのが集落に集中して出ている例というのは、韓半島ではなかなかないわけですね。したがって6世紀代にそういった集落が出てくる可能性は少ないのではないかと考えております。

土生田：集落としては確認できなくても、集落の中にこれは倭人の家ではないかというようなものが混じっているというような可能性も現状ではわかりませんか。

宋：現在までの段階ではそういうものが報告された例はありません。

土生田：そこで山本先生に伺いますが、これまで日本の墓制の独特なものだといわれていた横穴が、百済側でも偏っていますけれども多数発見されていますね。あるいはこれはちょっと違いますが、祭祀遺跡で日本製のモノが集中して出る遺跡もあります。そういったことから倭人の住居——倭人領ということは何論ないわけですが、九州の朝鮮半島の人達の住居が集中しているとい

うのも、これも朝鮮半島の領土では勿論ないわけで、こういう交流は当たり前のことであります
が——そういったことは、百済領では確認できますか。

山本：やはり墓制段階ではモノを残しますので、並んで見える所はあるのですけれども、集落において例えば日本独特の形をした住居址とかそういうものは、やはりありません。というか違いをはっきりと見分けることはできませんので、こういう形の住居があれば日本人だというのはなかなか難しいと百済でも思います。ただし、例えばたくさんではないですけれども須恵器が1点ずつ混じっていたりとか、あるいは、これは日本独特だといえると思いますが、祭祀に関連して子持勾玉が——確実に住居址に伴っているというふうにはわかっているものは、あまりないのですが——そういうモノが集落の遺跡から出てきたりというのはありますので、何かしら倭人が——本当にそこに定住していたかといわれたらちょっとわからないのですが——何か倭人が立ち寄りたり、あるいは何か関与したり、そういうものは集落でも少しずつはあります。ですが、やはり古墳などで、まとまってそれが出て、確実にここに住んでいたというような痕跡はまだないと思います。その他に、先ほどお話が出てきた前方後円墳の作られた近くに、住居址から埴輪形の土製品が出ていたというのはありますので、本当に倭人がそれを作ったのかといわれたらこれは疑問なのですが、痕跡が点々とある、というふうには今の段階ではいえないと思います。

土生田：今のお話でおわかりになるかと思いますが、古墳時代について考古学者は墓ばかりをやっていると、よくご批判を受けるのですが、そうではなくて資料の残りの問題でそうになっているだけでして、我々としては生活遺跡——住居址であるとか、あるいは生産遺跡も十分に気をつけているつもりなのですが、どうしても古墳に集中するという事は否めません。ですから逆に、古墳ばかりを取り上げて国家論をいうのは、私は非常に反対をしている立場です。そこで、住居等について亀田先生は一家言をもち、渡来人探しを住居址でもやっておられるのですから、ここはそれを裏返してですね、朝鮮半島で今後倭人探しをやるにはどうすれば良いのか、ちょっと提言していただきたいと思います。

亀田：じつはまさに倭人が行っている——火葦北国造の息子さんが百済に行って貴族になって日本に帰ってくる——という話が（『日本書紀』に）出てくる。熊本の南の方の人が行っています。当時の中部・南部の九州と朝鮮半島の関係もある程度反映している、実際にそういう記録もありますし、それから古い段階、伽耶の段階も——さきほどの吉備の反乱伝承は、上道臣田狭の奥さんが美人なので、雄略が奥さんをよこせとって旦那は朝鮮半島に派遣されてという——まさにそういう話がたくさん出てきますので、確実にそういうのはあるわけですが、残念ながら本当に逸話ということで……。いま山本さんがおっしゃったように、では、日本にしかないようなモノが出てくるのかというと、ポイントだと思いますが、いまおっしゃった滑石製品の問題であるとか、須恵器とかありますが、正直いって大変わかりにくいと思います。さらに申し上げますと、百済だけではないと思いますけれども、中国からの渡来人も来ているという話もしたと思いますが、それも、かなりの記録もそうですし、例えば武寧王の王妃の腕輪などは大変たくさんあるのです

が、あれを作っているのも中国の人じゃないかという話もあって、そういう人がもし百済で作っているのであれば当然百済にいるわけです。それから、武寧王自身のお墓づくりにもおそらく来ていると思うんですよ。そうすると、そういう人たちの痕跡もあるはずなのですが、今のところわかっていません。ですから、じつはミニチュアカマドに関してはそういう可能性があらうかと思えますし、今後は逆に朝鮮半島の中で、いわゆる百済なら百済、新羅なら新羅の中で異質な構造であるとかモノであるとか何かを探し出していただいでやるしかしようがないのではないかと。その中でいま出ましたモノ、それからお墓——実は横穴墓に関しても微妙は微妙で、中国にも少し感じは違いますがそういうのはあるし——ですから、そのへんの検討は今後きちんとやっけないとできないのではないのかなと思っています。広く、最近では韓国の方にも、そのへん、探してくださいと私もいっているんですけど。

土生田：そのへんのところは、国立博物館の館長として重要な地位にある宋義政先生にも、ぜひ今後お願いしたいということでもあります。

ご質問の半分くらいはご紹介したつもりです。そこで時間も押しております。研究者の方もたくさんいらっしゃっておりますので、一言ずつ総括やご批判をいただければと思います。まずは、考古学の方で酒井清治先生がいらっしゃいます。ぜひ酒井先生からお話をいただきたいと思えます。

酒井清治：私は須恵器をやっていますが、朝鮮半島に須恵器は出てきているのですが、東側の伽耶地域と、西側の地域、全羅道、馬韓といわれるのですが、大きな違いは東側は墓から出る。今のところはですよ。墓から出るのが主体ですけど、西からは墓の周溝とかそういうのから出るのが多いのですが、あとは祭祀遺跡や住居址から、たくさんでできます。そこが特徴かなと。その住居址から複数出てくる場合が多々みつかっています。そういう点でも——私は、日本に半島系土器が出てきたという、複数住居から出てきた半島系土器を持っているという所では、渡来人がいた可能性が高いかなと思っはいるのですが、確実ではありません。これはあくまでも仮定です。——そういう点では、馬韓に倭人が行った可能性は高い、そして住居に住んでいた可能性も高くなっているかと思えます。そして先ほどおっしゃっていましたが、埴輪がある地域という、埴輪形の土器が出てくるのは光州のある地域ですよ。その周りから埴輪の円筒形が出てくる。さらに外側からは壺形の埴輪が出てくる。ということでいうなら、光州の周辺に倭人が相当行っているかなと。それは前方後円墳との関係もあるかなとこのところですよ。ですから、私も倭人探しをしている最中ですよ。

土生田：突然の指名で申し訳ございません。今日は考古学の発表や討論の内容が多かったものですよ。……文献史学からは中野先生にお話をさせていただいたのですが十分に意を尽くせなかったのではないかと思います。また、中野先生に異論のある文献の専門の方もたくさんいらっしゃっています。国立歴史民俗博物館の仁藤先生に一言お願いしたいと思います。

仁藤敦史：総論と申しますか方向性としてはとくに異論があるわけではないのですが、帝国性ということは、もともと石母田さんのいわれる東夷の小帝国論は、近代の帝国主義というところから始まった議論で、帝国性というふうになってしまうとかなり薄まった話になっていくだろうという問題があります。古い方へどんどん遡らせていくと、卑弥呼の時代の帝国性みたいな話まで理論的には可能かなというところになるので、どこかで一定の歯止めをしないといけないだろうという感想を一点持ちました。

あと、中国の制度の模倣かどうかというレベルで考えるとすると、自国と同じ制度を他国に対して押しつけるような所がむしろ帝国性という所があるので、中国と似ているか違うかという観点で割り切るのではなく、倭国の東国の調を「任那の調」という形で強制するというその共通性の方がより帝国性なのではないかと私などは思います。そこらへんが少し気になりました。簡単ですが。

土生田：今後、機会はたくさんありますので、ぜひ別の所でバトルをしていただければと思います。國學院の鈴木靖民先生がいらっしゃいます。先生は勿論、文献史学ですが、考古学にも非常に詳しい。そういったことも含めて、今日のお話全体の指針をいただければありがたいと思います。よろしく願いいたします。

鈴木靖民：鈴木です。今日は勉強させていただくつもりでやってまいりました。お二人から最新の研究、特に亀田さんからはまとまった——凄いですよね、もう4世紀から8世紀にかかるまでですから、それを1時間ちょっとで。普通1年間かけて、講義でやるものだと思いますけれども、ありがとうございました。それから昨日の山本さんと、宋館長のお話はレジュメで拝読——拝読というか（ハングルは）読めないですけれども、惜しいことをしたとっております。それで、結局今の議論、討論、やり取りを聞いて思ったことは、さまざまな、とくに今回はモノですから考古資料ですが、それはやはりごちゃ混ぜになっていて、情報ももの凄く多すぎて、研究も遺跡がたくさんありますから、それをどういうふうに、少し大きくいえば、事実確認をし、歴史認識をするのかという——方法論も含めてですね——それが課題ではないかなと思うんです。歴史を捉えれば、いろいろな分野や立場があるわけですが、もう少し区別をしてやるのが良いのかなと思います。つまり、先ほど渡来人の痕跡で問題になっていましたように、モノだとさまざまなものが出てくるわけですね。それから住居とか建物だとか特定の人の建物だとかがあるわけですから、それを総括して国家史というのが良いのか、社会史というのが良いのか、それが今日——今日に限らない、どこでもそうなのですが——ごちゃ混ぜになっていて、それが悪いこととは限りませんが、何か一つの結論を組み立てるには、ここに来られた方だけではなく、今後の学会や、今日来られている歴史に関心のある方々のそれぞれの課題かなと思いました。

それから、先ほどこのプロジェクトのリーダーの荒木先生に伺ったら、あと1年あるということですので、ぜひ東アジア世界史というイメージが浮かぶような、歴史ですから史料に即して——考古の資料もですが、具体的な学問ですので、それをぜひしていただきたい。私自身は、日本列島だとか朝鮮半島というのは、二国間とか双方向的な研究の方法としては大変有効ですし、ま

だそういうことを一生懸命やる研究の段階だと思いますけれども、古代東アジア世界というふうにもし銘打つのであれば、東アジア世界全体の問題として取り上げてはどうかと思います。センターの『年報』の第4号に中国の李浩先生が、胡化・華化ということで、対外文化交流の成果に対する考え方を提起されております（李浩「胡化、華化与国际化—対唐代中外文化交流成就的几点新思考」）。それに関連して、私も報告した最後の所に、主に直接日本では穴沢啄光さんが、モデルを95年ごろ、江上波夫先生の記念論文集に書かれていて（穴沢啄光「世界史の中の日本古墳文化」古代オリエント博物館編『文明学原論—江上波夫先生米寿記念論集』山川出版社、1995年）、そういうのも一つの方法だと思っています。つまり、中国を東アジア世界の中心・中核と捉えて、その周りを周辺と捉えて——そして穴沢先生は、境界というのがあるのですけれども境界は良く分からないので——その次、辺縁とかその逆の縁辺でも良いのですけれども、少なくとも三層構造で説明できるのではないかと。モデル化した場合ですよ。そういう考えるきっかけになったのは、このメンバーの飯尾さんの挑発があった様に記憶していますけれど——考えてみたのですね。結構それで今日も説明できるなというふうに思っています。つまり、中国から——時代とかごっちゃにしています——中国から朝鮮半島に人なりモノなり伝わってきて、そして、それから朝鮮半島から日本列島に伝わってくる。そういうルートというか文化の伝播とか、人の移動とか交流があると思うんですね。その逆のベクトルでも良いのですけれども。それから、日本史のいい方でいえば、倭の五王の時代もそうですが、遣隋使・遣唐使の時代になると、今度は直接中国から日本列島にというコースというかルートというかができるわけですよ。それによってモノの移動だとか人の交流の形と性格、意味が変わってくるだろうと思っています。というふうにちょっと区別したらどうかかと。ですから私は、記号を介しますと、中国を“A”としたら、“A”から朝鮮半島に伝わったのは“A'”、で“A'”はイコール“B”で、“B”から日本列島に伝わったのは“B'”になるわけですね。ついでに日本の中のことまでいいますと、日本内部の先ほどの土生田先生の言葉でいえば「中央」、中心ですね、それからやっぱり今度は逆に中心になって、列島の周辺部分に広がっていくとかですね、交流があるとか、変わっていくとか変容があるわけですね。というふうに文化や政治、何でも良いのですけれど、それで結構説明できることがある。私個人では限界がありますので、ぜひこの強力な共同研究で、来年、土生田先生に報告していただくと良いんじゃないかな、と思っています。そういう意味では——最後に中野さんに対して批判的にいえば、日本と朝鮮半島のことを報告なさったのですけれども、やはり帝国性といった場合にはちょっと東アジア全体の議論にはなかなかなりにくいなというふうに思います。それから、個人的には大国という理解、私は現代の意味の——石母田先生の考えられた大国とは思想的には思っておりませんで、前回道教の土屋さんの報告の中の『三国史記』の史料にありましたし、さきほどの『隋書』の倭国伝の大国も、他の同じ時代の史料を見ると、大国というのは、今日中野さん自身がとり上げられた礼的な秩序のことを大国と中国ではいっていることは明らかなので、それとの関係をどうするかですよ。そうすると帝国性という言葉で良いのかどうか。少し思想的なことに触れましたけれど。

私個人的にはですね、5世紀ぐらいまでは自由に、規制が働いたとしても朝鮮と日本とは文化の交流やモノの移動はあるのだろうと思っています。6世紀の王権がコントロールするような

は日本史だとやはり継体・欽明朝以降ではないかなと思っています。それがないとさっき議論になっていた各地に広がっている、中央経由だとは思われない朝鮮半島からやってくる考古的な遺物や遺跡が説明しにくいだろうと思っています。同じようなことは、酒井先生がさっき触れられたかもしれませんが、栄山江流域の13基ある前方後円形の古墳の説明、誰が作ったかですね、説明しにくいのではないかと。あれはたぶん九州の1カ所ではない所との交流というか、関係を示すわけですね。少しまとまりが悪いですがけれども、ぜひこのプロジェクトの今後に期待したいと思います。

土生田：ありがとうございました。鈴木先生に、やはり凄い宿題をいただいてしまいました。当てなきゃよかったかなと思っているんですが……。おっしゃっていることは我々も肝に銘じてやらなければならないことだと思います。最後に考古学はモノの学問でございますので、どうしてもモノの把握に中心が行きがちですけれども、そのモノの把握を通して、それを作った、使った人たちの心情まで探らなければ考古学の意味はないと思います。ただ、それがあまりに事実から離れて想像の占める部分が多くなってしまうと学問ではなくなる、そこが難しい所ですがけれども、昔のように編年をして形態だけ書くような考古学であれば、将来はもう存続する意義はないと思っています。そういう所は、鈴木先生を始め他の学問の人との交流の中で勉強していきたいと思っています。二日間にわたってどうもありがとうございました。